

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2005.12) 6巻1号:21～23.

エッセイ 「旭川医科大学研究フォーラム」考—歯に衣着せぬ私見—

東 匡伸

## エッセイ

## 「旭川医科大学研究フォーラム」考 — 齒に衣着せぬ私見 —

東 匡 伸

先般、旭川医科大学研究フォーラム（以下、本誌）のエッセイ欄に寄稿するよう、編集委員会から依頼を受けた。発行のたびに大学から本誌を戴いているが、パラパラと頁を捲って斜め読み（斜め見？）する程度で過ごしてきた私に、エッセイを寄稿する資格があるのか、私自身、甚だ疑問に感じている。しかし、なぜ私が本誌に魅力を感じなかったのか、敢えて私見を述べることによって、仮令、大方から非難あるいは無視を受けようとも、私の気が晴れるので寄稿することにした。エッセイとは云えない内容であり、編集に携って努力しておられる編集委員の方々に大変失礼なこととは思いますが、お許しを戴きたい。

### 私見その1：旭川医科大学に邦文研究誌は必要か？

今から20数年前の黒田一秀学長時代に、旭川医科大学の邦文研究誌の発行について教授会に提案された。大方の教授の猛反対を受けて実現しなかったが、私も強硬な反対者の一人であった。何故反対したのか？それは、研究のグローバル化が進んでいる現代において、邦文研究誌の持つ役割の狭さにある。国民の税金を、研究機器・器具・試薬費ばかりでなく、その研究者も含めた人件費に使って行われた研究の成果を、日本国内にとどまらず世界に向かって公表するには、邦文研究誌が如何に無力であるかは自明の理である。その無力な邦文研究誌に論文を載せて、自己満足に陥ってしまう危険性も、その折に指摘された。日本国内に目を向けることの重要性も否定はしない。しかし、邦文研究誌に原著論文として研究成果を公表することは、自己満足を得る手段に成り下がって、税金の無駄使いになっているのが一般である。一方、邦文研究誌に、質の高い研究成果を英文で載せる努力は、先ず為されないであろう。そのような質の高い英文論文は、常識的に国外の欧文誌に投稿されるであろう。本誌が「研

究フォーラム」と謳う以上、質の高い研究成果を載せるのであれば、旭川医科大学の研究成果はこの程度かと見られることを私は恐れる。旭川医科大学においては、極めて質の高い研究が数多く為されているのであるから・・・。

私見その2：廃刊とせず、本誌を存続させるのであれば、本誌の内容を今後どのようにしたら良いのだろうか？

現状の内容で存続させるのなら、少なくとも現誌名から「研究」の文字を外して、「旭川医科大学フォーラム」（「旭川医科大学の広場」くらいの軽い表現）とすべきであろう。

一方、「旭川医科大学研究フォーラム」として存続させるのであれば、先ず、「依頼論文」、「投稿論文（原著・査読済）」を外すべきであろう。依頼しなければ原稿が集まらない、あるいはわざわざ査読済みと断らなければならない、その様な不毛な旭川医科大学の研究の現状なのかという誤解を招かないためにも・・・。

では如何にすべきか？現在の旭川医科大学における研究成果には、瞠目すべきものがある。しかし、各講座におけるこれらの質の高い研究成果が、Nature, Science, J. Biol. Chem., Blood, J. Immunol. 等々、各研究分野の世界の一流雑誌に掲載されていることについて、或いはその研究内容がどのようなものであるのかについて、大学の内に於いてさえも、あまり知られていないのではなからうか？講座あるいは教授、助教授の研究内容については、大学の定期的フォーラムで口頭発表が為されているが、その内容がどのように評価されているのか、不問に付されている。

そこで、次の3点に本誌の存在目的を設定してはどうであろう。

(1) 「総説の頁」として、自分の研究成果も含めたその

分野の現在の世界的研究趨勢を解説し、他分野の研究者の啓蒙に役立てること。

これまでも本誌に総説が掲載されてきたが、より充実させるべきであろう。この総説によって、その研究者の研究が、世界の研究レベルのどの位置に存在するかも示されるであろう。むしろ、その点を明確に示した総説でなければならない。また、毎号に「若手研究者の総説の頁」として、数講座の若手研究者が、完成、未完成を問わず、自分の研究を中心に世界の現状について、邦文でもよし英文でもよし、どしどし書く場になると、己の研究に対する自己反省も生まれ、また将来の発展にも結びつくであろう。若手研究者がしばしば陥る“研究視野狭窄”から回避させることもできよう。また最近問題になっている“日本語表現能力の低下”、“句読点の付け方を含む文章構成能力の低下”の防止にも役立つこと、必定である。「総説」なればこそ・・・。

- (2) 「論文紹介の頁」として、各講座の研究成果の中で、一流英文雑誌に載った原著論文の内容を紹介すること。

この「論文紹介の頁」には、その1~2頁ずつを各講座に割り振って、その講座でその半年あるいは1年間に欧文公表した、最も質の高い論文2~3編の内容を載せることには如何であろうか。論文別刷の1頁目の雑誌名、巻、頁~頁、年、論文タイトル、著者名、所属、そうしてAbstractをそのままコピーして載せることは、多忙な諸氏にとっても負担にならないであろう。出来れば、そのAbstractの下に、論文中の主要データ1~2点がコピーして添えられると、なお良いかと思う。今までにも各講座の業績が記録・公表されてきたが、著者名、論文題目、雑誌名と巻、頁、年のみの羅列で、具体的内容には殆ど及んでいなかったと思う。このようなことは、今ではインターネットで簡単に検索できるが、旭川医科大学として纏めることによって、旭川医科大学の高い研究レベルを一目瞭然に周知させることが出来るであろう。2~3編では少ないと言われるかとも思うが、量より質が問われるべき時代である。なお、論文の著作権は、多くの場合、著者から出版社に譲渡されているので、Abstractのコピーを載せるには、出版社の許可を得ることが必要になる恐れはある。しかし、その労をしても、なお余りある意

義があるのではなかろうか。常識ではあるが、本誌に載せたそのコピーを、その著者らの業績の一つとしないことである。

- (3) 「教育の頁」として、教育に関する論説あるいはデータ等を載せて、討論の場を設けること。

教育（入試を含む）に関するレポート等が、「特集」として、あるいは「依頼稿」として今までにも採り挙げられているが、“より良い教育”とは難問であり、古今東西、全ての教育機関に課せられている重要課題である。今後も本誌で採り挙げ、単にレポートとせず、若手を含めた教職員の意見交換の場とし、医学教育改革に資することは有意義なことである。その意味からも、本誌が存続するのなら、本誌名を「旭川医科大学教育研究フォーラム」と改めては如何であろう。

私見その3：どうしても邦文で公表したい、あるいは邦文で公表しなければならないという研究成果を無視する積もりはない。それぞれの分野における活動記録は、将来に亘って必要であろう。例えば、邦文研究誌「化学と生物」（日本農芸化学会）の投稿規程に、「特に日本語でなくては適切に示すことができない研究成果、国内においてのみ強く関心が持たれる研究成果が望ましい」とされている。それ以外は、同学会の英文誌への投稿を勧めている。化学と生物の分野で、どのような研究成果がこの投稿規定に当てはまるのか、理解に苦しむところでもあるが、旭川医科大学においては、人文社会系あるいは看護系の研究成果がこれに該当するかと思う。これらの研究成果は、それぞれの分野の国内邦文専門誌に投稿することを推し進め、その内容を、私見その2で述べた「論文紹介の頁」に載せては如何であろう。

私見その4：本誌を英文誌にすれば良いのか？

私はそれも意義が無いと思う。先般、朝日新聞の科学論特集に於いて、“英文誌なら安泰とも限らない”との表現で、以下の記載があった。“故湯川秀樹博士の提案で1946年に発刊した理論物理学の英文誌 Progress of Theoretical Physics が、今や存亡の危機にある。素粒子物理学の世界で最も有名な論文の一つ、「小林・益川論文」を1973年に掲載した雑誌として知られる。年間600本以上だった投稿数が、今や年間200本に減っ

た。同分野の論文の多くは、米国物理学会の雑誌か、**Science** や **Nature** に投稿されているらしい”。このような現象は、私の関係する微生物学分野でも、また他の分野でも起こっている。研究者が、より質の高い、多くの研究者の目に触れる研究誌に投稿しようとすることは、必然の帰結である。まだまだ本邦の英文研究誌は無力である。

国立大学法人化に伴い、大学の運営にも従来とは一変した諸難問を抱え、八竹学長を始めとして諸先生には苦慮されているとのことである。国からの運営費交付金に対しても効率化係数が掛けられるとのことを、

風の便りで耳にしている。効率を常に意識し、漫然としていられない現状と聞く。些細なことかもしれないが、本誌の存続についても、効率の面から検討が加えられるべき時ではなからうか。

大学のグローバル化に伴い「大学の質の世界標準」を定め、大学間で競い合う動きもあるとの報道もあり、まだまだ述べたい私見はあるが、いささか冗漫になってしまった。学外から眺めるのみで、学内の本質的問題からは程遠い私見であることは重々承知している。もし、ここに述べた私見が何らかの刺激になれば、望外の幸いである。

(旭川医科大学名誉教授、元教育研究厚生補導担当副学長)